黄葉と平戸に残る竹葉に
酔ひて愛でたし再会の女

令和六年六月二十一日

大中臣正比呂

神霊が鳥と化して飛ぶ、西海の島の戸＝岬を「飛鸞戸」と呼んだことが「平戸」の由来である。その名は銘酒「飛鸞」に蘇った。日宋貿易の港、平戸に留学先から帰着した僧の栄西は、宋から持ち帰った茶の種を肥前国の霊仙寺で栽培して喫茶を蘇らせた。その栄西が開いた京都の建仁寺に茶碑が残っている。黄葉は「濃う好う」の茶、竹葉は酒を洒落て云う。彼の友はその銘酒を持ち、彼の女は中国の銘茶を持って、来てくれた。